

2011 年度 私立大学図書館協会 海外認定研修報告書

獨協大学図書館
高島 豊

I はじめに	2
II ドイツの図書館見学の動機と目的	2
III ドイツの大学について	2
III-1 大学までの道のり	
III-2 ドイツの大学の種類とシステム	3
IV マインツ大学図書館訪問	3
IV-1 マインツ大学について	
IV-2 マインツ大学中央図書館について	4
IV-3 マインツ大学中央図書館の館内見学	5
IV-3-1 総合案内センター(Informationszentrum)	
IV-3-2 閲覧室	6
IV-3-3 グループ利用席	7
IV-3-4 貸出・返却カウンター	
IV-4 図書館長との面談	8
V ヨハネス・ゲーテンベルク博物館	9
VI ボン大学図書館訪問	10
VI-1 ボン大学について	
VI-2 ボン大学中央図書館について	11
VI-3 ボン大学中央図書館の館内見学	12
VI-3-1 総合案内センター(Informationszentrum)	
VI-3-2 返却・利用者登録カウンター	
VI-3-3 閲覧ホール	13
VI-3-4 複写室	14
VI-3-5 書架	15
VI-3-6 ラーニング・カフェ	16
VI-3-7 新聞・雑誌コーナー	
VI-3-8 共同学習室	17
VI-3-9 見学を終えて	
VII おわりに	17
VIII 参考文献、および URL	19

I はじめに

2010年8月9日～24日に、家族旅行でヨーロッパを訪れた際、ドイツのマインツ大学、およびボン大学を訪問し、大学図書館を見学する機会を得た。

筆者は図書館に配属となる前、1998年から2009年までの11年間、獨協大学国際交流センターに勤務し、主にドイツ語圏の大学との交流、学生の送り出しや、受け入れ等に携わってきたが、この間に、ドイツ語圏の多くの大学のスタッフと業務を通じて良好な関係を築くことができた。こうした方々のうちの多くとは、図書館へ異動後も連絡を取り続けているため、上記両大学の図書館の見学も、これらの方々を通じてスムーズに実現できた。

プライベートな旅行の合間の大学図書館訪問であったため、研修内容としては必ずしも十分とは言えないが、館内見学と図書館関係者へのインタビューを行えたことは大いに参考になり、また、今後、ドイツの大学図書館スタッフとのコンタクトの手段が開けたという意味でも大変有意義であった。

II ドイツの図書館見学の動機と目的

2009年に図書館に異動となる前の、国際交流センターでの業務を通じて培ってきたドイツ語によるコミュニケーションのためのノウハウや、ドイツの大学関係者とのネットワークを、図書館でも何らかの形で活かせる方法を考えていた。その一つとして、ドイツの大学図書館を訪問し、それを日頃の図書館業務の参考にしたり、活かしたりする可能性があるのではないかと思い、旅行を機にドイツの大学図書館を見学することにした。

獨協大学図書館で筆者は、利用者サービスを主に扱う閲覧係に配属されたため、ドイツの両大学の図書館見学は、限られた見学時間ということもあり、利用者サービスを中心に以下の3点に絞って見学することにした。

- ①利用者の目線でドイツの大学図書館の使い勝手について見聞する
- ②日頃閲覧業務で行っている利用者対応を、ドイツでの状況と照らして検証する
- ③利用者サービスについて、ドイツの図書館スタッフがどのような姿勢で取り組み、どのような問題点を抱えているかについてインタビューを行う

III ドイツの大学について

ドイツの図書館見学について具体的な報告を行う前に、ドイツの大学について簡単に触れておきたい。

III-1 大学までの道のり

ドイツの子供達は小学校教育(4年間)を終える段階(10歳)で、将来大学へ進むか、あるいは職業訓練教育を受けて就職を目指すかを選択する。大学への進学を希望する子供は、日本でいえば、中学校と高等学校が統合されたような形のギムナジウム(Gymnasium)を卒業してアビトゥア(Abitur)と呼ばれる大学入学資格を取得しなければならない。ギムナジウム卒業時の年齢は19

歳。大学入試はなく、アビトゥアを取れば、原則として自動的に希望の大学に入ることができるため、ドイツには大学受験競争というものが事実上存在しない。

Ⅲ-2 ドイツの大学の種類とシステム

ドイツで「大学」と名の付く高等教育機関は 2011 年現在で 418 校ある。これらの大学の殆どは国立(実際の教育行政は州単位)である。

ドイツの大学は大きく分けて総合大学(Universität)と専門大学(Fachhochschule)がある。総合大学が、さまざまな学部学科を擁して、基礎研究や応用研究など純粋な「学問」に力点を置いているのに対し、専門大学では、限定された分野の学部学科で成り立っており、より実践面が重視され、職業に必要な専門的で高度な訓練や実習が行われる。近年、専門大学の数が大きく伸び、2011 年現在で 211 校ある(総合大学は 105 校)。

ドイツの大学の学位システムは、長い間ドイツ独自のもので、最初の学位(マギスター或いはディプロム)取得まで平均 6 年程度かかっていたが、近年、大学改革によりモジュール制による世界共通のシステムへの移行が始まり、2010 年以降は、より短期間で取得できる学士(Bachelor)と、その後の修士／博士課程に分かれるシステムに変更された。

Ⅳ マインツ大学図書館訪問

マインツ大学は、筆者が国際交流センターに所属していた際、職場の海外自己研修制度を利用して、2002 年の 6 月に、インターナショナルオフィスで 2 週間の職場研修を受けさせて頂いたことがある大学である。その当時、研修のお世話をしてくださった同大学インターナショナルオフィスのキューパー(Frau Küper)氏とモーア(Frau Mohr)氏が、大学図書館の見学ツアーをお膳立てして下さいました。2010 年 8 月 21 日の午前中にマインツ大学を訪問し、図書館を見学させて頂いた。

Ⅳ-1 マインツ大学について

大学のプロフィール

【正式名称】

ヨハネス・グーテンベルク大学／Die Johannes Gutenberg-Universität

【所在地】

ドイツ中西部のラインラント・プファルツ州の州都、マインツ市

【創立】

1946 年 5 月。マインツ大学の母体となった旧大学の創立は 1477 年に遡る

【各部】

11 学部。専攻コースは 90 以上に上る

【学生数】

約 34600 名

【留学生】

約 4200 名(130 カ国以上)

マインツ大学は、ドイツ中西部のラインラント・プファルツ州の州都であるマインツ市にあり、学部数や学生数でみてもドイツ最大級の大学の一つ。大学ランキングでは常にトップクラスを占めている。日本の協定大学には、日本大学、同志社大学、久留米大学がある。ドイツでは珍しいキャンパス大学で、広大なキャンパス内には各種教室棟や講堂のほか、学食やカフェテリア、研究所、実験棟、植物園、学生寮、中央図書館や学部所属の図書館等が配されている。写真(左)手前は、大学の正式名称ともなっているヨハネス・ゲーテンベルクの胸像。



IV-2 マインツ大学中央図書館について

大学図書館のプロフィール

【創立】

1946年。現在の図書館は1964年に開館。

【図書館数】

中央図書館1館、学部付属・研究所付属図書館10館

【蔵書数(全館の総数)】

約200万冊

【開館時間(中央図書館)】

平日/週末:8:00~翌朝6:00 (夜間はセキュリティーサービスが対応)

【閲覧席】

250席(PC設置席:100席)

【貸出】

貸出冊数:制限なし/貸出期間:4週間(延長可)

【館内施設】

総合案内センター、閲覧室、グループ利用室、飲食室等

IV-3 マインツ大学中央図書館の館内見学

マインツ大学では、大学中央図書館 (Zentralbibliothek) 総合案内センター (Informationszentrum) のケーニッヒ=フランク (Frau König-Frank) さんに、図書館内を案内して頂いた。

写真は中央図書館の外観。正面の奥が入口になっている。



IV-3-1 総合案内センター (Informationszentrum)

図書館入口のBDSのゲートを入ると(入館チェックは行っていない)、最初にPCがたくさん備えられた大きなホールがあった。

Informationszentrum (英: Information Center) と呼ばれていて、総合案内センターのようなところ。とても広くて明るい空間になっている。

PC設置席は館内で100席ほどあるとのこと。奥にはOPAC専用端末も並ん



でいた。コーナーには、図書館利用に関する総合案内カウンターがある。

このホールまでは、飲食物の持ち込み、飲食は自由にできるが、ここから先の閲覧席や書架へは、ミネラルウォーターのペットボトル以外は持ち込み禁止となっている。また、リュックサックやバッグなどの手荷物も、持ち込めるのはこのホールまでで、ここから先へ入る場合は、荷物は入口のロッカーに入れなければならない。

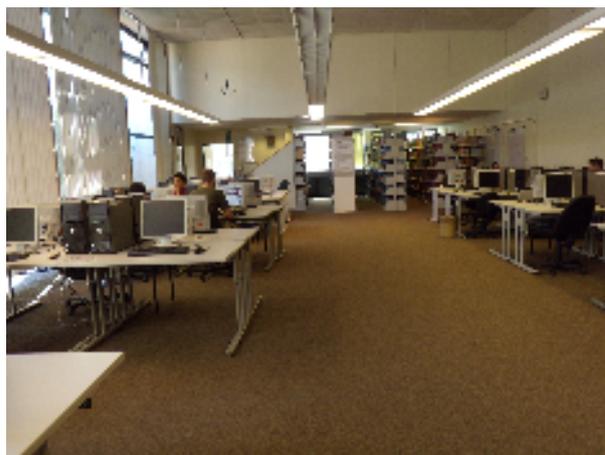
IV-3-2 閲覧室

閲覧室入口へのガラスの自動扉には、マインツ大学の正式名称にもなっている、活版印刷術を発明したヨハネス・グーテンベルクの肖像がデザインされていた。

左下の写真が一般の閲覧席。吹き抜けの大きな空間を中 2 階的にフロアで分け、閲覧スペースと書架スペースに別れている。右下の写真は参考図書閲覧室。PC の設置されていない閲覧席は全部で 150 席ほど。夏休み中で利用者は少なかったが、試験期ともなるとかなり込み合うそうで、席を確保するのは大変とのことだった。



図書館は、学生や教員など大学の構成員以外の学外者でも 18 歳以上なら誰でもほぼ同じ条件で利用できるとのこと。図書館案内のパンフレットには、マインツ大学図書館は「ラインラント・プファルツ州最大の学術図書館」と、市民の利用も念頭に入れて紹介されている。



開架書架をいくつか案内してもらった。左下は授業に関連した教材用の書架で、教材は最低 3 部～資料によっては最大 20 部の複本を揃えているということ。右は一般図書用の書架。



書架の脇には、このようなカゴが重ねておいてあった。貸出冊数の上限は設けられていないため、何冊でも貸出可能。試験期などには、こうしたカゴを両手にぶら下げて何十冊も本を借りる学生の姿が見られるのかも知れない。



IV-3-3 グループ利用席

館内のグループ利用席(部屋)は、右の写真の一箇所のみということで、やはりもう少し場所が欲しい、とケーニツヒ=フランクさんもおっしゃっていた。



現在の中央図書館は、1960年代当時の学生数(4000名程度)を想定して作られているため、現在は他大学の図書館同様に収容能力的には危機的状況にあるとのこと。

獨協大学図書館でも入館者数は年々増加し、試験期ともなると席の確保が大変だが、ドイツの状況ははるかに深刻のようだ。学生数の増加は図書館での席の不足に限らず、授業用の教室不足も生み、市内の体育館や映画館を臨時的講義教室としてしている大学がある、というニュースを読んだこともある。以前は無料だったドイツの大学の授業料は2006年から全国的に有料となり(といっても、年間1000ユーロ=11万円程度)、お金を払っているのに学習環境が悪化していることに学生の反発は強く、時々ドイツ全土で大規模な学生デモも行われている。

IV-3-4 貸出・返却カウンター

とても広いカウンター。カウンター内はスタッフ用のスペースで、予約本の取り置き棚が見える。

手前は自動貸出機で、図書館を案内してくれたケーニツヒ=フランクさんが、実際に貸出処理をデモしてくれた。ICタグを読み取る方式だった。

貸出冊数は無制限、貸出期間は4週間で、予約がついていない場合は延長可能。



IV-4 図書館長との面談

館内を一通り案内して頂いたあと、館長室に案内して頂き、そこで館長(Direktor)の Dr. アンデアフープ(Herr Dr. Anderhub)氏と面談する時間を頂いた。主にこちらの質問に答えていただく形の面談で、以下のようなお話を伺うことができた。

・中央図書館の職員は総勢約 110 名(外部委託している夜間勤務のセキュリティーサービスは含まない)。勤務体制はフルタイム職員、6 時間勤務職員、4 時間勤務職員... という具合に細かく区分されているため、総数が多くなっている。

・大学図書館は市民にも広く開放していて、居住地域や勤務地による制限は設けておらず、18 歳以上で住所確認のできる身分証があれば全国誰でも(外国人含)利用登録ができる。年間の学外入館者数は約 60 万人、学外者への貸出件数は 70 万件に上る。とりわけ、年配の利用者は勉強熱心で(学生よりも)、年配者(50 歳以上)を対象とした、図書館利用ガイダンスも行っている。

・貸出資料を延滞し、メールによる警告に応じなかった場合は、1 件につき 2 ユーロの罰金を徴収している¹。延滞に罰金を科すことは、大学図書館に限らず公共図書館でも全面的に行われており、これは 100 年来のドイツの伝統である。

・他の図書館との資料の相互貸借は全ヨーロッパ規模で一般的に行われているが(1 件 15 ユーロ)、イギリスと、ドイツでも特殊な事情を抱えるバイエルン州は、料金が非常に高く問題になっている。また、全世界規模での相互貸借も行っている。

・マインツ大学の正式名称が「ヨハネス・ゲーテンベルク大学」と呼ばれていることに関して、ゲーテンベルクゆかりのコレクション(例えば「ゲーテンベルク聖書」)の有無や、ゲーテンベルクにちなんだ図書館としての蔵書構成のコンセプトについて伺ったところ：

1477 年に創立した旧マインツ大学の蔵書は、現在マインツ市立図書館へ移管されている。現在のマインツ大学は、16 世紀から 19 世紀の資料も所蔵しているが、現在の主な蔵書構成、また、今後の蔵書構築計画は、20 世紀～21 世紀の資料が中心である。

¹ 罰金の徴収は利用者の口座から引き落とされる、ということ。ドイツの大学では、学籍登録をする際に、諸費用を引き落とすための口座開設が義務付けられている。

V ヨハネス・ゲーテンベルク博物館

マインツに生まれ育ち、活版印刷術を発明したゲーテンベルクにちなんだヨハネス・ゲーテンベルク博物館が、マインツ旧市街の大聖堂の近くであり、マインツ大学を訪れる前日に見学した。

博物館にはゲーテンベルク以前から現代の印刷術まで、時代を網羅した数々の印刷機や印刷物が展示されている。特別展示室には獨協大学図書館で復刻版を所蔵している「ゲーテンベルク聖書」のオリジナルも展示されていた。

1時間おきにゲーテンベルク時代に使われた活版印刷機のモデルで、聖書の1ページの印刷実演が行われている。実演では、鉛合金による活字の鑄造から、見学者にハンドルを回させて、プレスして印刷が仕上がるまでを見せてくれる。ハンドルを回した見学者(相当な力がある様子)には刷り上った聖書がプレゼントされる。

「日本コーナー」もあり、ここでは浮世絵の多色刷りの工程を、版木などの実物で詳しく紹介したり、獨協大学図書館でも多く所蔵している「ちりめん本」などが展示されていた。



ゲーテンベルク式印刷機



日本コーナーのちりめん本

コレクションや展示をゆっくりくまなく見学すれば、半日以上かかるほど充実したゲーテンベルク博物館は、ここを訪れるためだけにマインツを訪れる価値がある。フランクフルトなど、マインツの近くまで来るようであれば、マインツまで少々足を延ばし、この博物館を見学することをお勧めする。

VI ボン大学図書館訪問

ボン大学の図書館を訪問したのは、やはり国際交流センターに所属していた時、仕事を通じて親しくコンタクトを取るようになった、ボン大学インターナショナルオフィスのスタッフ、ロホター（Frau Lochter）氏の存在が大きい。ロホター氏は、筆者の業務内容に合わせて、利用者対応を担当するセクションの責任者による大学図書館の見学ツアーをお膳立てして下さいました。

2010年8月21日、午前中にマインツ大学図書館を見学した後、午後に列車でマインツよりボンへ移動し、ボン中央駅でロホター氏に迎えて頂いて、ボン大学図書館を訪問した。

VI-1 ボン大学について

大学のプロフィール

【正式名称】

ライン・フリードリヒ＝ウィルヘルム大学
Die Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität, Bonn

【所在地】

ドイツ北西部のノルトライン・ウェストファーレン州のボン市

【創立】

1818年10月、プロイセン国王フリードリヒ・ウィルヘルム3世により設立

【学部】

7学部/約80の専攻コース（日本語学科あり）

【学生数】

約27500名

【留学生】

約4000名（約140カ国）

ボン大学のあるボン市は、マインツの北西約125キロ、ドイツ北西部のノルトライン・ウェストファーレン州にある。東西ドイツ分裂時代には、西ドイツの事実上の首都でもあった。

ボン大学は、2018年には創立200年を迎えるプロイセン時代からの伝統を持つ総合大学で、研究・教育



の拠点として国際的にも高く評価されている。大学は、講義教室や大講堂、セレモニーホールの入った宮殿(元は選帝侯の居城→写真前頁)を中心として、人文系の教室・施設はボンの市内中心部にあり、理科系はボン市の一地区であるポッペルスドルフ(Poppelsdorf)にある。日本の協定大学には、早稲田大学、慶應義塾大学、上智大学、京都大学が名を連ねている。

VI-2 ボン大学中央図書館について

大学図書館のプロフィール

【創 立】

1819年。現在の図書館は1960年に開館。

【図書館数】

中央図書館1館、学部付属・研究所付属図書館多数

【蔵書数(全館の総数)】

約204万冊

【開館時間(中央図書館)】

平日:8:00~0:00 / 土日:10:00~0:00

【閲覧席】

400席(PC設置席:50席)

【貸 出】

貸出冊数:100冊 / 貸出期間:4週間(延長可)

【館内施設】

総合案内センター、閲覧室、グループ利用ゾーン、複写室、飲食室等

ボン大学の図書館は、1818年大学創設の1年後の1819年にできたが、1944年の空襲で破壊され、現在の図書館は1960年に建てられたもの。創設時の図書館に所蔵されていた資料は、空襲を受ける前に教会などに疎開させていたために、焼失を免れたということだった。

蔵書総数は約204万冊で、ゲーテンベルク以前の中世の写本など、歴史的に価値の高い資料も数多く、作曲家シューマンの自筆譜や書簡等も所蔵しているそうである²。

この図書館は、ボン大学の中央図書館の機能を果たしているが、主に人文科学系、社会科学系の学生のための図書館で、理科系の学生のための図書館はボン市の一地区であるポッペルスドルフ(Poppelsdorf)にある。

図書館の正式名称は「ボン大学 &



² Newsletter 2011 年第 54 号によれば、ボン大学図書館が所蔵する代表的なシューマンの自筆譜が、近々(日程未定)デジタルライブラリーで一般公開されるとのことである。

州立図書館」(独:Die Universitäts- und Landesbibliothek Bonn／略称:ULB)と呼ばれていて、大学図書館の機能と、州立図書館の機能を併せ持っている。入館者数は1日平均 2000～2500人。写真(前頁)は中央図書館の外観。

VI-3 ボン大学中央図書館の館内見学

ボン大学では、大学中央図書館(Hauptbibliothek)で利用者サービス部門のチーフを勤める Dr. ゼーグレフ(Herr Dr. Segreff)氏に、中央図書館内を案内して頂いた。このツアーをお膳立てして下さったロホターさんと、彼女のパートナーのエドウィン(Edwin)さんの4人で館内を見学した。

VI-3-1 総合案内センター(Informationszentrum)

マインツ大学の図書館同様に、入口を入ると総合案内センターの機能を持つ Informationszentrum (英: Information Center)があった。LAN 接続された PC、OPAC 専用端末が置かれ、案内カウンターの入った明るくて広い空間となっている。PC 設置席は館内で 50 ほどあるとのこと。



飲食物の持ち込みは「ラーニング・カフェ」Lerncaféのみ可で、その他のゾーンへはミネラルウォーターのペットボトル以外は持ち込み禁止となっている。「ジュース類を本にこぼされたら大変だからね」ということだった。

リュックや鞆は総合案内センター以外に持ち込むことはできない。図書館の入口にはロッカーが並んでいて、手荷物はここに預けてから閲覧・書架ゾーンへ入る。飲み物持ち込みのルールや、バッグを入口で預けるルールはマインツ大学図書館と同じである。また、マインツ大学と同じく、ここにもスーパーにあるようなカゴが重ねてあった。



VI-3-2 返却・利用者登録カウンター

カウンター(次ページ左上)はとても広いホールにある。ボン大学の図書館も近年キャパシティ

不足に悩まされているそうだが、これならスペース的にはまだ余裕があるように感じた。右下の写真は、カウンター内にあるリクエスト図書の取り置き棚。取り置き期間は 10 日間。平置きにされた本に、リクエストのデータが印字されたメモがはさんである。



VI-3-3 閲覧ホール

閲覧ホール(Lesesaal)は、自然光を多く取り入れ、透過性を重視するという図書館全体のコンセプトに即して、快適な環境を求めているということだった。夏休み中だが、比較的多くの利用者がいた。

館内の閲覧席(PC 設置席を除く)は 350 席あるとのことだが、恒常的な座席不足に悩まされていて、特に試験期などは深刻な状況とのこと。図書館では、学生に優先予約権のある共同学習室の利用を呼びかけたり、座席を離れるときのルールを作るなどして、学生ができるだけ公平に座席の確保ができるよう、対策に腐心していた。座席を離れるときの以下のルールはとても参考になった。



ゼーグレフ氏の説明を受ける筆者。左は図書館ツアーをお膳立てしてくれたロホターさん(エドウィンさん撮影)

(座席を離れるときのルール)

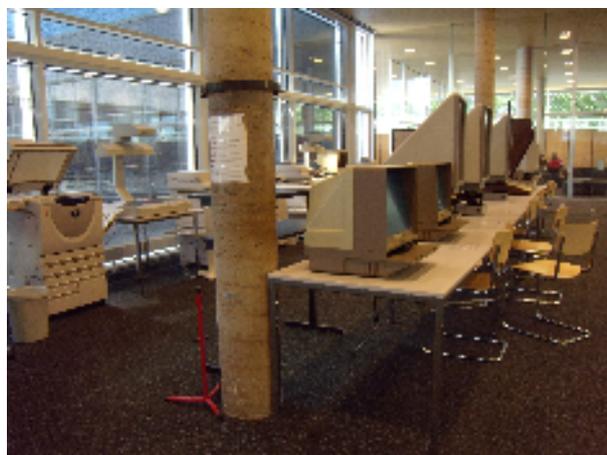
閲覧席を一時的に離れる場合は、離席した時刻をメモして机の上に置く。離席できるのは通常 30 分まで、12 時~14 時は 60 分。これを超えて戻らない場合は、撤去時刻と荷物引取り番号をメモした紙を残し、机上のものを撤去、図書館で預かる。離席時刻のメモのない不在席は、直ちに撤去されることがある。

閲覧ホールはライン川に面していて、大変良い眺めであった。夜になると、川を行き交う船のイルミネーションがとてもきれいとのことで、夜間は、昼間とはまた違った眺めが楽しめそうだ。この全面のガラス窓には、風や雨、日差しを感知して自動的に開閉するロールシャッターが取り付けられているとのこと。日差しの具合を見てブラインドの開閉スイッチを操作している獨協大学図書館にも是非欲しいシステムである。



VI-3-4 複写室

コピー機、マイクロリーダー&プリンターなどがずらりと並んでいた。コピーは有料で、1枚7セント(約8円)。右の機械は Bookeye といって、テーブルに置いた資料をカメラで読み取り、データを USB メモリー(写真の中央下寄りに見える)に記録できるというブックスキャナー。複写するために本を広げることによる資料への損傷のリスクを防げるブックスキャナーの利便性は高いと感じた。



VI-3-5 書架

開架書庫と閉架書庫を案内してもらった。蔵書総数は約 204 万冊、貸出は 100 冊まで 4 週間、2 度の延長が可能。教員は、最初の貸出時は学生と同じ 4 週間後が返却期限だが、1 回目の延長時には 11 ヶ月連続で借りることができる。延滞した場合は、マインツ大学同様罰金が科せられ、1～10 日は 2 ユーロ、11～20 日は 5 ユーロ・・・という具合に延滞が長引くに従って料金が上がって行く。貸出期限 5 日前に一斉にお知らせメールの配信を行い、期限日の周知を図っているとのことだった。

左下の写真は開架書庫で、右下はモノグラフ(研究論文)の所在を示した案内図。年ごとの購入順に配架され、古いものから 1 年単位で閉架書庫へ納庫している。



こちらは閉架書庫(地下)。奥行きがあり、なかなか壮観であった。閉架書庫の資料を受け取れるのは、請求した翌日ということで、これはちょっと不便だと感じた。



VI-3-6 ラーニング・カフェ

館内で唯一、ミネラルウォーター以外に飲食が可能なエリア(ガラスの向こう側)になっている。手前の空間は新聞・雑誌コーナー。

ラーニング・カフェには飲み物の自販機もあり、くつろげるソファ類が置かれていた。右手前で横になっている利用者がいたが、案内してくれたゼーグレフ氏は「この大きなソファはこういうふうに寝そべってもらえるように用意したんです。こ



こで利用者が自由にくつろいでもらえるのが何よりです。」と嬉しそうにおっしゃっていた。「滞在型の図書館」、「くつろげる図書館」というコンセプトは日本の図書館でも近年重視され、採り入れられているが、利用者がこのように寝そべってくつろぐことまで想定していたという話を伺い、「くつろげる図書館」にも多様な考え方があることを学んだ。



VI-3-7 新聞・雑誌コーナー

ラーニングカフェの手前は新聞・雑誌コーナーで、閲覧スペースがゆったり取られていた。館内のエリアはこのようにガラスで仕切られていることが多く、透過性を重視しているという図書館のコンセプトが活かされていた。

雑誌は、タイトルがわかるように、表紙のロゴが貼られたボックス型の棚に、タイトル毎にバックナンバーが入っていた。最新号もボックスの中に収納されている。雑誌は1年分が揃った時点で合冊製本され、書庫(開架)へ移動するとのことだった。



写真を撮ろうとしたら、案内のゼーグレフ氏が「こうするとわかりやすい」と言って、棚のふたを開けて、中の雑誌を見せてくれた。

VI-3-8 共同学習室

共同学習室(Gruppenarbeitsraum)には大きなホワイトボードと、PCなどを接続できる壁掛けのモニター画面があった。予約は1週間前から可能で、4名～最大6名まで同時に利用できる。



VI-3-9 見学を終えて

約1時間半に渡り、丁寧なガイドをして頂いたおかげで、ボン大学図書館の横顔をイメージ

することができた。図書館見学の間、筆者の家族はロホターさんの同僚で、日本語堪能のアンネ＝マリーさんという方に、ボン市内を案内してもらい、最後に図書館の総合案内センターで落ち合った。学外者のチェックはあまり厳しく行われていないようだった。

最初にも触れたが、ボン大学の中央図書館は州立図書館の機能も兼ねているということだが、学外者で利用できるのは、ボンとその周辺地域の住民、それに同じ州(ノルトライン＝ウェストファーレン州)の大学の学生に限られ、年20ユーロの利用料がかかる。資料の貸出条件も制限があり、マインツ大学の図書館に比べると、学外者への開放は制限されているように感じた。

案内してくださったゼーグレフ氏は、筆者と同様の利用者対応セクションの方で、今後も折に触れて連絡を取り合っていきましょう、と言って頂いた。その後、ボン大学図書館からはニュースレターが定期的に届くようになり、購読させて頂いている。

VII おわりに

マインツ大学図書館でも、ボン大学図書館でも、予定の時間(1時間)を超えて、大変丁寧に館内を案内して頂き、こちらの質問にも丁寧に答えて頂いたおかげで、ドイツの大学図書館を概観し、その雰囲気を感じることができた。また機会を見つけて、ドイツの他の大学図書館も見学できればと思う。

今回、両館を見学して印象に残った点、参考とすべきと思った点を記しておく。

- ・両館とも、現在使われている図書館は1960年代前半に建設された建物であり、既に築40有余年経過している。それにも拘わらず、館内は大変近代的にリフォームされ、コンピュータ利用のための設備も整い、高度情報化社会を反映した図書館として十分に機能しているように感じた。日本でも、図書館の役割や利用形態など、時代と共に急速に変化していくことが予想されるが、現在の建物を「箱」として維持しつつ、時代に対応した設備を整える際には参考になると感じた。
- ・両館とも、利用対象者が教員や学生など、大学構成員に限らず、広く市民の図書館として開かれ、利用されていることが印象に残った。日本でも、国立大学を中心に市民への開放は行われるようになってきた。今後は私立大学の図書館においても、一般市民の図書館利用について、更に

積極的に検討する必要があると思われるが、その場合に留意すべき点など、ドイツの大学図書館の事例などを調べることは有益だと思った。

- ・両館とも、日本ではまだ非常に少ない深夜までの開館時間(マインツ大:翌朝 6 時/ボン大:0 時)を実施し、貸出冊数の上限も大変多く(マインツ大:無制限/ボン大:100 冊)、利用者の事情に拘わらず、誰もが大変利用しやすい条件が整っていると感じた。
- ・延滞に対する罰金制度を設けたり、手荷物の持ち込み制限を行うなど、大学の共有財産である図書館資料を利用するに当たっては、厳格な運用を行うことの大切さを改めて学んだ。
- ・利用者数の増加による閲覧席不足の問題が深刻である、という状況を伺ったが、座席数不足にどのように対処すべきかなど、共通認識の上に立ち、お互いに何か良いアイデアを出し合えば、利用者対応レベルにおいても、国際間で相談できるのではと感じた。
- ・館内での飲食については、両館ともエントランスホールまでは自由となっており、日本の図書館と比べ、かなり規制が緩いと感じた。ただ、館内での水分補給については、日本では、特にこの夏、震災による原発事故の影響で、全国的に節電のために空調温度が高めに設定され、熱中症対策などで規制が緩められるケースが増えてきた。獨協大学図書館でも、7 月より、PC席などの機器利用席を除き、フタ付のこぼれない容器の飲み物に限り、全ての閲覧席での水分補給をできるようにした(試行中)。この緩和で、日本の図書館での水分補給の状況は、ペットボトルの水のみ、というドイツの状況より緩和される傾向にあるが、館内での飲食のあり方についても、他国の状況を参照することは有益であろう。

水分補給の問題に限らず、利用者サービスのあり方について、国内だけではなく、外国の大学図書館関係者と意見を交換することは、より良い利用者サービスを実現するうえで大切であり、そうした際のチャンネルを増やすことができたのは、大変有意義であった。

最後に、今回の2つのドイツの大学図書館見学にご尽力頂いた、マインツ大学国際・オフィス・ミヒャエラ・キューパー (Frau M.Küper) 氏、同オフィスのエルケ・モーア(Frau E.Mohr)氏、ボン大学国際・オフィスのガービー・ロホター(Frau G.Lochter)氏、そして、図書館見学のガイドをして下さったマインツ大学図書館のエリザベート・ケーニヒ＝フランク (Frau E.König-Frank)氏、ボン大学図書館の Dr.クラウス・ゼーグレフ(Herr Dr.K. Segreff)氏、それに、貴重な面談時間を頂いた、マインツ大学図書館長のDr.アンドレアス・アンデアフーフ(Herr Dr.A. Anderhub)氏に、格別の感謝を申し上げたい。

VIII 参考文献、および URL

<文献>

- ・Jahresbericht 2009
Universitätsbibliothek Mainz, 2009
- ・kurz & knapp
Universitäts- und Landesbibliothek Bonn, 2010
- ・Lesezeichen-Zeitzeichen zur Wiedereröffnung der Universitäts- und Landesbibliothek Bonn
- ・Ordnung für die Bibliothek der Johannes Gutenberg-Universität Mainz
Universitätsbibliothek Mainz, 2005
Universitäts- und Landesbibliothek Bonn, 2008
- ・Profil 2010
Universitätsbibliothek Mainz, 2010
- ・『ドイツの大学の留学生受入れの現状』 高島 豊
『獨協国際交流年報』第 16 号 2003 年 p.249-282

<URL>

- ・Newsletter Nr. 54, 08.09.2011 Universitäts- und Landesbibliothek Bonn アクセス日:2011 年 10 月 4 日
<http://www.ulb.uni-bonn.de/die-ulb/publikationen/newsletter/nr-54>
- ・Statistisches Bundesamt Deutschland - Hochschulen アクセス日:2011 年 9 月 6 日
<http://www.destatis.de/jetspeed/portal/cms/Sites/destatis/Internet/DE/Navigation/Statistiken/BildungForschungKultur/Hochschulen/Hochschulen.psml>
- ・Universitäts- und Landesbibliothek Bonn アクセス日:2011 年 9 月 6 日
<http://www.ulb.uni-bonn.de/>
- ・Universitätsbibliothek Mainz アクセス日:2011 年 9 月 6 日
<http://www.ub.uni-mainz.de/>